



サハリン樺太史研究会
2016年度活動報告書

2017年10月10日
サハリン樺太史研究会

—2016 年度活動報告書—

目次

会長あいさつ

活動概要

例会・関連シンポジウム等

研究成果刊行物（付：参考資料 非会員による研究成果刊行物）

研究プロジェクト（付：参考資料 非会員による研究プロジェクト）

サハリン樺太史研究会会則・役員

報告書刊行について

本会は 2008 年 7 月に発足した。その後、例会開催、共同調査実施を重ね、さらに 2010 年には研究会誌を刊行、2011 年より公式 HP を開設し、研究会内外への発信にも力を入れるようになった。年度活動報告書も 2008 年度分から刊行し、2015 年度活動報告書は 8 冊目の年度活動報告書となる。

2011 年度分以降、参考資料として非会員の研究動向も日本国内限定ではあるものの掲載することとした。このことによって、日本国内のサハリン樺太史研究全体における本会の位置がより明確になろうし、また本報告書によって、完全にまでとはいかないものの、日本国内におけるサハリン樺太史研究の全体的動向を俯瞰することが可能になればと編者として願う。

なお、本報告書記載の情報の一部はインターネット上の情報を参照したものであり、若干の不正確さが残っていることがあり得ることをことわっておく。また、会員については本報告書編集時点で本会のメンバーリストに登録している者を指しており、当時は未会員であった場合もあることはご了承いただきたい。

2017 年 10 月 10 日

中山大将

（サハリン樺太史研究会世話人兼公式HP運営担当者）

—会長あいさつ—

サハリン・樺太は、前近代においては先住民を担い手とした、大陸側から千島列島にいたる海を介した交易ルートの一環であり、近代には日本とロシアの接触地域をなし、両国間で何度も国境線の引き直しと大規模な人口移動が繰り返された特異な歴史を有する島です。

この島の呼称も、幕末までは「北蝦夷地」とよばれ、明治初年から「樺太」とよばれるようになり、全島ロシア領有になると「薩哈噠」の3文字が当てられました。日露戦争後の北緯 50 度以南日本領有により、ふたたび「樺太」となり、第二次世界大戦後はサハリンと呼ぶことが一般的となりました。

近年、この島に改めて歴史研究の光を当て、この島の住民が幾世代にも亘って関わった歴史的経験を捉え直そうとする機運が日本、ロシア双方で高まりつつあります。また、日本とロシアとの研究交流は、今世紀に入り、活発に行われるようになりました。たとえば、北海道大学スラブ研究センターとサハリン大学を拠点として、「ロシアの中のアジア／アジアの中のロシア」第 5 回研究会「サハリン・樺太の歴史」(2004 年 7 月 29 日～30 日)、同第 11 回研究会「サハリン・樺太史セミナー(Ⅰ)」(2005 年 9 月 21 日)、同第 13 回研究会「サハリン・樺太史セミナー(Ⅱ)」(2005 年 12 月 3 日)、「日本とロシアの研究者の目から見るサハリン・樺太の歴史」(2005 年 11 月 1 日～2 日、2006 年 2 月 16 日～17 日)、「国際シンポジウム：サハリンの植民の歴史的経験」(2008 年 5 月 6 日～7 日)と幾度も研究会が開催されてきました。そして 2008 年の「国際シンポジウム：サハリンの植民の歴史的経験」開催後に、シンポジウム参加者を中心に 2008 年 7 月、サハリン・樺太史研究会が発足しました(初代会長：原暉之北海道大学名誉教授)。

サハリン・樺太史研究会は、これまでの樺太史・サハリン史研究が日本、ロシアにおいて、それぞれ別個に行われてきたことを踏まえ、双方の研究成果を学ぶとともに双方の研究成果の交流、資料保存情報の交流などの研究交流を進め、「一國史」にとらわれないサハリン・樺太史を描くことを目標としています。

本会は札幌を拠点として研究会、シンポジウムを定期的に(年間 5 回程度)開催しております。これら研究会、シンポジウムは参加自由で、どなたでも参加できます。サハリン・樺太史の研究に関心をお持ちの方は、本会事務局にお知らせいただけましたら、案内メールを差し上げます。

2013 年 12 月 17 日

サハリン樺太史研究会会長 白木沢旭児(北海道大学大学院文学研究科教授)

—活動概要—

樺太通史『樺太四〇年の歴史：四〇万人の故郷』および『図録 樺太を生きる』刊行

研究者の共同執筆による初の樺太通史『樺太四〇年の歴史』が刊行された。編著者は原暉之会員、天野尚樹会員の二氏であり、これに執筆者として三木理史会員、中山大將會員が加わった。発行元の全国樺太連盟の意向で、全国多くの公共・教育機関図書館へと寄贈されたほか、一般注文も予想以上に多く寄せられているということである。より多くの人々に読んでもらえるように叙述形式も一般の学術書とは異なり読み物として楽しめる工夫がなされ、樺太史研究の到達点を開陳する内容となっており、本研究会にとっても記念碑的書籍となるはずである。また、尾形芳秀会員が監修者として参加した『図録 樺太を生きる』もそれに半年先だって全国樺太連盟より刊行された。

北サハリン史研究の拡充

原暉之会員代表の科研「サハリン(樺太)島における戦争と境界変動の現代史」などを通じて本会でも多面的な北サハリン史研究が蓄積されてきたが、今年度はこの流れとは別に独自に外交史の観点から北サハリン問題に取り組んできた京都大学関連の若手研究者 2 名も招いて、シンポジウム「1920 年代の北サハリン: 出兵・占領・油田開発」を開催した。

漁業・海運史研究の進展と検討

漁業・海運史研究についても、第 38 回例会と第 39 回例会で研究報告会と書評会を行ない、その到達点と課題を確認した。また、若手として樺太漁業史に取り組んでいた植田展大会員の論文「戦間期樺太のニシン漁業」も刊行された。

樺太〈戦後〉史研究の現状と課題

樺太引揚研究に先鞭をつけていた竹野学会員の長年の研究の成果「樺太からの日本人引揚げ(1945～49 年): 人口統計にみる」の刊行を契機に、第 41 回例会では樺太引揚研究やサハリン残留研究に取り組んでいる研究者らが、研究の現状と課題について報告を行なった。

資料基盤の充実

「極東ロシア・シベリア所蔵資料ギャラリー」(北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター)での旧北樺太石油技師牛島信義氏旧蔵オハ油田関係地図その他戦前期のサハリン関係の地図数点の収録・公開、および樺太関連記事も多い雑誌『殖民公報』全 123 号の総目次データの作成、希望者への頒布、皓星社データベース「ざっさくプラス」を通じた公開に兎内勇津流会員が貢献した。

ソ連占領初期南サハリン史料勉強会

兎内勇津流氏が主催するソ連占領初期のソ連公文書の勉強会は、引き続き活動を続けている。

—例会・関連シンポジウム等—

■ 第 38 回例会

日時:2016 年 5 月 21 日

場所:北海道大学人文・社会科学総合教育研究棟W201 室

報告 1 シベリア出兵における日本海軍水路部の「内密」測量について……………小林瑞穂(明治大学)

報告 2 第二次大戦期サハリン島海域の航行問題…………… 兔内勇津流(北海道大学)

■ 第 39 回例会 シンポジウム「1920 年代の北サハリン:出兵・占領・油田開発」

日時:2016 年 8 月 26 日

場所:北海道大学人文社会科学総合研究教育棟 W201

第 1 部 司会…………… 中山大将(京都大学地域研究統合情報センター)

報告 1 1920 年初夏における北サハリン石油利権交渉:アメリカの非公式の政策の展開……………
…………… 伊丹明彦氏(京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程単位取得退学)

報告 2 1920 年代後半のソ連北サハリン政策:コンセッションとトラスト・サハリンネフチの創設……………
…………… 藤本健太郎氏(京都大学大学院文学研究科博士課程)

第 2 部 司会……………天野尚樹(山形大学人文学部)

報告 3 ニ港事件:どのような事件だったのか……………井竿富雄氏(山口県立大学)

報告 4 日本軍の保障占領末期に北樺太から日本に避難したロシア人:1924 年ー1925 年……………
…………… 倉田有佳氏(ロシア極東連邦総合大学函館校)

総合討論 司会……………天野尚樹(山形大学人文学部)

サハリン・樺太史研究会総会

主催:サハリン・樺太史研究会

共催:京都大学地域研究統合情報センター、科学研究費補助金挑戦的萌芽研究「境界地域史への地域情報学活用:サハリン島ミクロ歴史情報データベースの構築と応用」(研究代表:中山大将)、科学研究費補助金基盤(B)「サハリン(樺太)島における戦争と境界変動の現代史」(研究代表:原暉之)

第40回例会 北洋漁業の世界:最新の研究成果を読む

日時:2016年11月19日

場所:北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター大会議室

書評 神長英輔著『「北洋」の誕生:場と人と物語』(成文社、2014年)

評者 植田展大(東京大学大学院博士課程)

書評 荻野富士夫著『北洋漁業と海軍:「沈黙ノ威圧」と「国益」』(校倉書房、2016年)

評者 小林瑞穂(明治大学)

主催: サハリン・樺太史研究会

共催: 科学研究費補助金基盤(B)「サハリン(樺太)島における戦争と境界変動の現代史」(研究代表:原暉之)

第41回例会 樺太の(戦後)史研究の到達点と課題

日時:2016年12月10日

場所:北海道大学人文社会科学総合研究教育棟 W201

司会 田村将人(東京国立博物館)

第1部 樺太引揚げ

趣旨説明 中山大将(京都大学)

1945年前後における南樺太の人口移動:戦時期から引揚げまで 竹野学(北海商科大学)

樺太からの「脱出」と、戦後北海道における引揚げ者 木村由美(藤女子中学・高等学校 非常勤職員)

樺太からの引揚げ:函館引揚援護局の資料からの検討 ジョナサン・ブル(北海道大学)

第2部 サハリン残留・帰国

サハリンにおける旧樺太住民の残留と帰国 中山大将(京都大学)

サハリン帰国者のトランスナショナルアイデンティティ形成:2~3世を中心に.....

..... スヴェトラナ・パイチャゼ(北海道大学)

総合討論 16:50~17:30

—研究成果刊行物—

(五十音順)

東俊佑 近世史

【論文集】

東俊佑「トコンヘ一件」再考：北蝦夷地ウシヨロ場所におけるアイヌ支配と日露関係」白木沢旭児編著
『北東アジアにおける帝国と地域社会』北海道大学出版会、2017 年 3 月 31 日。

天野尚樹 ロシア極東近現代史・北東アジア国際関係史

【著書】

原暉之、天野尚樹編著『樺太四〇年の歴史：四〇万人の故郷』全国樺太連盟、2017 年 3 月 31 日。

【論文集】

天野尚樹「樺太の地理と人びと」原暉之、天野尚樹編著『樺太四〇年の歴史：四〇万人の故郷』全国
樺太連盟、2017 年 3 月 31 日。

天野尚樹「樺太の「内地編入」」原暉之、天野尚樹編著『樺太四〇年の歴史：四〇万人の故郷』全国樺
太連盟、2017 年 3 月 31 日。

天野尚樹「樺太の戦争、一九四五～四九年」原暉之、天野尚樹編著『樺太四〇年の歴史：四〇万人の
故郷』全国樺太連盟、2017 年 3 月 31 日。

池田裕子 教育史

【定期刊行物】

池田裕子「樺太最初の中学校創設：中川小十郎の役割に着目して」『社会システム研究』33 号、
2016 年 9 月。

池田裕子「樺太庁拓殖学校の再編」『日本の教育史学』59 号、2016 年 10 月。

井澗裕 建築史

【著書】

井澗裕編著『ブックレット・ボーダーズ No.3 稚内・北航路：サハリンへのゲートウェイ』国境地域研究
センター、2016 年 7 月 10 日。

*【著書】…著書、編書、翻訳書など。【論文集】…定期刊行物以外の文献に掲載された論文など。【定期刊行物】…学術誌、紀
要、会誌などに掲載された論文など。

■植田展大…………… 漁業史

【論文集】

植田展大「戦間期樺太のニシン漁業」伊藤康宏、片岡千賀之、小岩信竹、中居裕編著『帝国日本の漁業と漁業政策』北斗書房、2016 年 10 月 21 日。

■尾形芳秀…………… 樺太史

【著書】

竹田輝雄、氏家等、尾形芳秀監修『図録 樺太を生きる：樺太関係資料』全国樺太連盟、2016 年 7 月。

■加藤絢子…………… 先住民族史

【定期刊行物】

加藤絢子「樺太における先住民への「外地法」適用の実態」『北海道民族学』13 号、2017 年 3 月。

■倉田有佳…………… 来日ロシア人史

【論文集】

倉田有佳「ロシア系日本人：100 年の歴史から見えてくるもの」佐々木てる編、駒井洋監修『マルチ・エスニック・ジャパニーズ：〇〇系日本人の変革力』明石書店、2016 年 5 月 25 日。

倉田有佳「日本軍の保障占領末期に北樺太から日本へ避難・亡命したロシア人(1924-1925 年)」中村喜和、長縄光男、沢田和彦、ポダルコ・ピョートル編著『異郷に生きる VI：来日ロシア人の足跡』成文社、2016 年 9 月 28 日。

■鈴木仁…………… 文化史

【定期刊行物】

鈴木仁「樺太庁長官物語その(7)樺太民政長官熊谷喜一郎」『樺連情報』797 号、2016 年 9 月 1 日。

鈴木仁「例会報告要旨 樺太における郷土研究・郷土教育の展開」『道歴研年報』17 号、2016 年 9 月。

鈴木仁「日本領樺太におけるキリスト教史考(2)聖公会編」『北海道地域文化研究』9 号、2017 年 3 月。

*【著書】…著書、編書、翻訳書など。【論文集】…定期刊行物以外の文献に掲載された論文など。【定期刊行物】…学術誌、紀要、会誌などに掲載された論文など。

■竹野学……………日本経済史

【論文集】

竹野学「樺太からの日本人引揚げ(1945～49年):人口統計にみる」今泉裕美子、柳沢遊、木村健二
編著『日本帝国崩壊期「引揚げ」の比較研究:国際関係と地域の視点から』日本経済評論社、
2016年6月20日。

■田村将人……………アイヌ史

【論文集】

田村将人「サハリン先住民族の文化と観光網走(環北太平洋地域の伝統と文化(1)サハリン)」『北方
民族文化シンポジウム網走報告』31号、2017年3月。

■中山大将……………農業史・移民史

【論文集】

中山大将「もうひとつの「帰国者」:サハリンから日本へ」佐々木てる編、駒井洋監修『マルチ・エスニッ
ク・ジャパニーズ:〇〇系日本人の変革力』明石書店、2016年5月25日。

中山大将「離散をつなぎなおす:なぜサハリン残留日本人は帰国できたのか」秋津元輝、渡邊拓也編
著『せめぎ合う親密と公共:中間圏というアリーナ』京都大学学術出版会、2017年1月17日。

中山大将「森と共に生きる人びと、一九一五～二四年」原暉之、天野尚樹編著『樺太四〇年の歴史:四
〇万人の故郷』全国樺太連盟、2017年3月31日。

中山大将「樺太開発の新展開」原暉之、天野尚樹編著『樺太四〇年の歴史:四〇万人の故郷』全国樺
太連盟、2017年3月31日。

【定期刊行物】

中山大将「書評 玄武岩、パイチャゼ・スヴェトラナ『サハリン残留』」『北海道新聞』2016年6月19日。

■原暉之……………ロシア極東近現代史

【著書】

原暉之、天野尚樹編著『樺太四〇年の歴史:四〇万人の故郷』全国樺太連盟、2017年3月31日。

【論文集】

原暉之「漁業根拠地からの離陸、一九〇五～一五年」原暉之、天野尚樹編著『樺太四〇年の歴史:四
〇万人の故郷』全国樺太連盟、2017年3月31日。

原暉之「平時から戦時へ、一九三七～四五年(一)」原暉之、天野尚樹編著『樺太四〇年の歴史:四〇
万人の故郷』全国樺太連盟、2017年3月31日。

*【著書】…著書、編書、翻訳書など。【論文集】…定期刊行物以外の文献に掲載された論文など。【定期刊行物】…学術誌、紀
要、会誌などに掲載された論文など。

■藤本健太郎…………… 外交史

【論文集】

藤本健太郎「北サハリン売却問題とソ連中央(1923年)」麻田雅文著『ソ連と東アジアの国際政治1919-1941』みすず書房、2017年2月17日。

■麓慎一…………… 近世史

【論文集】

麓慎一「19世紀後半における日露関係とサハリン島の諸民族(環北太平洋地域の伝統と文化(1)サハリン)」『北方民族文化シンポジウム網走報告』31号、2017年3月。

■松村正直…………… 文学史

【著書】

松村正直『樺太を訪れた歌人たち:松村正直評論集』ながらみ書房、2016年11月10日。

■三木理史…………… 歴史地理学

【論文集】

三木理史「炭鉱で生きる人びと、一九二五～三六年」原暉之、天野尚樹編著『樺太四〇年の歴史:四〇万人の故郷』全国樺太連盟、2017年3月31日。

三木理史「戦時下における「孤島化」」原暉之、天野尚樹編著『樺太四〇年の歴史:四〇万人の故郷』全国樺太連盟、2017年3月31日。

■山田祥子…………… 言語学

【定期刊行物】

山田祥子「サハリン先住民の言語接触とウイльта語の方言特徴」『北方民族文化シンポジウム網走報告』31号、2017年3月。

*【著書】…著書、編書、翻訳書など。【論文集】…定期刊行物以外の文献に掲載された論文など。【定期刊行物】…学術誌、紀要、会誌などに掲載された論文など。

参考資料……………非会員による研究成果刊行物

- 【論文集】池田貴夫「日本領期の樺太における温泉開発と温泉をめぐる人びとの精神誌」白木沢旭児編著『北東アジアにおける帝国と地域社会』北海道大学出版会、2017年3月31日。
- 【定期刊行物】アレクサンダー ヴァシレフスキー「日本海・オホーツク海の島嶼世界における中世の概念」『北方民族文化シンポジウム網走報告』31号、2017年3月。
- 【定期刊行物】エカテリーナ グルズジェワ「植民地時代・ポスト植民地時代におけるサハリン先住民の文化変容」『北方民族文化シンポジウム網走報告』31号、2017年3月。
- 【定期刊行物】イーゴリ サマーリン「17-19世紀のサハリン南部のアイヌによる天然資源利用システム研究の情報源としての地名学」『北方民族文化シンポジウム網走報告』31号、2017年3月。
- 【著書】近世繪圖地圖資料研究会編『千島・樺太・蝦夷(6)』科学書院、2016年12月。
- 【定期刊行物】熊木俊朗「紀元一千年紀前後におけるサハリンと北海道の先史文化交流(環北太平洋地域の伝統と文化(1)サハリン)」『北方民族文化シンポジウム網走報告』31号、2017年3月。
- 【定期刊行物】佐藤健二「柳田国男「明治三十九年樺太紀行」再読(柳田国男収集考古資料の研究)」『国立歴史民俗博物館研究報告』202号、2017年3月。
- 【定期刊行物】辻原万規彦、角哲、青井哲人「日比谷図書文化館所蔵の樺太・台湾・旭川の火災保険特殊地図」『日本建築学会技術報告集』第23巻53号、2017年2月。
- 【定期刊行物】中村和之「モンゴル帝国のサハリン島への侵攻とアイヌ(環北太平洋地域の伝統と文化(1)サハリン)」『北方民族文化シンポジウム網走報告』31号、2017年3月。
- 【定期刊行物】福田正宏、V. A. グリシェンコ「サハリン／日本列島における新石器文化の環境適応」『北方民族文化シンポジウム網走報告』31号、2017年3月。
- 【著書】北海道立北方民族博物館編集『サハリン = Sakhalin』北方文化振興協会、2017年3月。
- 【定期刊行物】堀江則雄「書評『日本領樺太・千島からソ連領サハリン州へ』」『日本とユーラシア』、2016年9月15日。
- 【著書】前澤哲也『古来征戦幾人か回ル:いくさに出れば、帰れないのだ』あさを社、2016年9月。
- 【定期刊行物】増井寛也「謝遂『職貢図』満文解説訳註:アムール流域とサハリンの諸民族を中心に」『北海道立北方民族博物館研究紀要』26号、2017年3月。
- 【定期刊行物】松本皎編著「『樺太日日新聞記事翻刻中川小十郎氏巡視随行記:葛西猛千代と脇田嘉一の略歴、太田達人の年譜』7号、2017年1月。
- 【定期刊行物】湊照宏「書評 柴田善雅著『植民地事業持株会社論:朝鮮・南洋群島・台湾・樺太』」『経営史学』第51巻4号、2017年3月。
- 【論文集】吉井文美「北樺太石油・石炭利権をめぐる日本とソ連:1939年の交渉を中心に」麻田雅文著『ソ連と東アジアの国際政治 1919-1941』みすず書房、2017年2月17日。

*【著書】…著書、編書、翻訳書など。【論文集】…定期刊行物以外の文献に掲載された論文など。【定期刊行物】…学術誌、紀要、会誌などに掲載された論文など。

一研究プロジェクト一

(代表者五十音順)

■池田裕子……………教育史

[継続]池田裕子(東海大学札幌)「樺太における文化史研究」科学研究費補助金・基盤研究(C)、
2015-2017年度。

■井澗裕……………建築史

[最終]井澗裕(北海道大学)「帝国日本における「北進論」の特質と影響: 樺太と千島を例に」科学研究
費補助金・基盤研究(C)、2014-2016年度。

■小川正人……………先住民族史

[新規]小川正人(北海道博物館)「近代北海道・樺太におけるアイヌ民族による学校設置: その歴史的
意味に関する基礎研究」科学研究費補助金・基盤研究(C)、2016-2018年度。

■中山大将……………農業社会史

[新規]中山大将(京都大学)「境界地域史への地域情報学活用: サハリン島マイクロ歴史情報データベー
スの構築と応用」科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究、2016-2018年度。

■原暉之……………ロシア極東近現代史

[最終]原暉之(北海道大学)「サハリン(樺太)島における戦争と境界変動の現代史」科学研究費補助
金・基盤研究(B)、2013-2016年度。

■参考資料……………非会員による研究プロジェクト

[最終]坂根嘉弘(広島修道大学)「日本帝国圏における戦時農業政策の比較史的研究: 社会関係に着
目した地域分析」科学研究費補助金・基盤研究(C)、2013-2016年。

[継続]日比嘉高(名古屋大学)「書物取次ネットワークと小売書店に関する研究: 旧満洲・朝鮮半島・樺
太等を中心に」科学研究費補助金・基盤研究(C)、2015-2018年。

* 掲載している研究プロジェクトは、本会関係者が代表者をつとめるもののうち、サハリン樺太史関連のもののほか、周辺地域・領域をテーマにする物も含んでいる。[新規]…今年度より開始したもの。[継続]…中間年度にあたるもの。[最終]…最終年度にあたるもの。[単年]…今年度開始した単年度のもの。

サハリン・樺太史研究会会則

2015 年 6 月 21 日改正

2011 年 5 月 28 日改正

2009 年 5 月 16 日採択

1. 本研究会はサハリン・樺太史研究会と称する。
2. 本研究会は、サハリン・樺太を対象地域とし、主として歴史分野に関する研究の促進と研究者の交流を目的とする。
3. 本研究会は、その目的を達成するために次の事業をおこなう。
 - (1) 定例研究会(例会)・シンポジウムなどの開催。
 - (2) 共同の研究・調査、およびその成果の公開。
 - (3) サハリンの大学・研究機関との交流、情報交換および共同研究の促進。
 - (4) その他本研究会の目的を達成するために適当な事業。
4. 本研究会は、サハリン・樺太の歴史に関心があり、その目的に賛同し、事業に協力する個人の会員からなる。
5. 新年度最初の例会時に総会を開催する。総会は本研究会の最高議決機関であり、総会の議決は原則として出席会員の過半数によって成立する。
6. 本研究会には次の役員をおく。

世話人(若干名)・会長(1名)・副会長(1名)・事務局長(1名)。
7. 世話人は総会で選出し、世話人の互選により会長・副会長・事務局長を選出する。
8. 会長は本研究会を代表し、会務を統括する。
9. 副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときはその職務を代行する。
10. 本研究会に事務局をおく。事務局長は会長・副会長のもとで本研究会の事務全般を担当する。
11. 役員任期は2年とする。ただし再任はさまたげない。
12. 本会則は2015年6月から発効する。本会則の改正は役員協議を経たのち総会の議決による。

サハリン・樺太史研究会役員 (2016 年度末現在)

2015 年 6 月 21 日選出

2016 年 8 月 26 日追加選出(*)

会長： 白木沢旭児

副会長： 天野尚樹

事務局長： 鈴木仁

世話人： 井潤裕、竹野学、田村将人、兔内勇津流(*)、中山大将(*)

(なお、田村将人は2017年7月22日付で退任、池田裕子が同日付で世話人に就任)

=====

サハリン樺太史研究会 2016 年度活動報告書

発行日：2017 年 10 月 10 日

編集者：中山大將

発行者：サハリン樺太史研究会

[公式 HP] <http://sakhlinkarafutohistory.com/home.html>

お問い合わせは、上記 HP の問い合わせフォームよりお願いいたします。

=====